

ばあちゃん の 雪

春待ち りこ

ばあちゃんの雪

「もう、長くは持たないらしいよ。」

淡々とした声で、明は言った。

明はその言葉を、もう何百回も心の中に言い聞かせて、噛み砕き、消化し、
悲しみの感情をうまく理性で包み込んだ後だったのかもしれない。

動揺していたのはむしろ、幸子のほうだった。

明の母であるばあちゃんが倒れたのは、五日前。

いつも「元気だねえ。」と近所の人から感心されるほど、よく働く人だった。

ばあちゃんの病。それは思いもよらない、まさに青天の霹靂。

でも、幸子はこう考えることした。ばあちゃんは、七十歳を超えている。

身体のどこか一つくらい悪くなってもおかしくはない。

これまで、ずっと休まず働き続けてきたのだから、少しくらい休んだほうがいい。

これは、ばあちゃんに神様が与えてくれた休暇なのだと……。

幸子がこの家に嫁いで、もう十五年になる。

その間、ずっとばあちゃんは働き続けていた。

朝は、誰よりも早く起きて、畑仕事に出向いて行く。

家に帰って朝食を食べる頃には、ひと仕事済ませた後だ。

そして、食事がすむと早速、家の中の掃除を始める。

幸子が手伝おうとすると、ばあちゃんはよくこう言った。

「掃除は、趣味みたいなもんだ。きれいにしていくのが楽しくて仕方がない。

だから悪いけど、幸子さん。わしの楽しみをとらんでおくれ。

その代わりに、幸子さんには台所を全部任せるから。

どうもわしゃ、料理っていうものが苦手な。」

ひと通り、家の掃除を終えて初めて、

ばあちゃんはゆっくりお茶を飲む。

それはそれは、美味しそうに飲むものだから、

お茶を淹れた幸子のほうまで幸せになってくる。

「幸子さんが来てくれて、楽をさせてもらっとるよ。

朝取りの収穫が終われば、朝ごはんは出来ちよるし、

こんなに美味しいお茶は飲めるしな。」

姑ならばたまには、嫌味の一つでも混ざりそうなものだが、
ばあちゃんの言葉には、何の棘も無かった。
それどころか、いつも優しい気遣いに満ちた言葉が返ってくる。

朝の一杯を終えると、またばあちゃんは畑に向かう。
そして、昼まで畑仕事。昼食の後は、
良太の遊び相手をしてくれた。
良太は、結婚して十年目にやっと出来た明と幸子の一人息子である。

「今日からお前たちも、わしのことを、『ばあちゃん』と呼んどくれ。
みんなにそう呼ばれるようになるのが、夢だったんよ。」

良太が生まれた日。
初めて良太の顔を見るなり、ばあちゃんはそう言った。
今まで見たこともないような嬉しそうな顔をして……。
明も幸子もばあちゃんのその言葉に素直に従った。
最初は呼び慣れなかった『ばあちゃん』という呼び名も、
今ではすっかりなじんでいる。

ばあちゃんはまるで、宝物でも扱うように、
良太を大切にしてくれていた。
かといって、決して甘やかすわけではない。
人として、間違っている時はちゃんと叱り、そして諭した。
まだ、五歳だというのに、良太は大抵のひらがなは読めたし、
花の名前もよく知っていた。
時には、雲の形から、明日の天気まで予想した。
みんな、ばあちゃんが良太に教えてくれたことだ。

家族への配慮も忘れず、よく働き、常に笑顔をたやさない。
幸子は、そんなばあちゃんのが好きだった。
この家に嫁いで来て良かったと心から思っていた。
友人の中には、姑との折り合いが悪く、
家庭がギクシャクしているものも少なくはない。
うちは、ギクシャクするどころか、
うまくいきすぎていて怖いくらいだ。

幸せに怯えることもあるということを、
幸子は嫁に来て初めて知った。

ただ、時々こうも思う。
ばあちゃんのように、私は一生なれないかもしれない。
そう思うたびに、とても虚しい気持ちに襲われた。
それが、自分の嫉妬心であることを十分理解している。
だから、余計虚しさが増していくのだ。
でもそれは、贅沢な悩み。
幸子にとって、幸せであるがゆえの虚しさだったのだから。

そのばあちゃんが、畑仕事をしている時に、突然倒れた。
近所の人々がすぐに気付いて、救急車を呼んでくれたらしい。
病院に運ばれ、そのまま入院。いろいろな検査をした。
その結果を今朝、明が聞きに行ってくれていた。
明の帰りは、幸子が思っていたよりずっと遅かった。
夕方近くになって、やっと明は戻ってきた。
やけにすっきりとした顔をしている。
そして、淡々とした声で言ったのだ。

「もう、長くは持たないらしいよ。」

ばあちゃんは、日に日に弱っていった。
いつも元気で生気に満ちていた顔は、あっという間に痩せこけた。

それでも、笑顔だけは絶やさない。

頬骨が浮き上がる顔になっても、ばあちゃんはいつも笑っていた。
幸子の一番の心配は、良太のことだった。
もちろん、ばあちゃんの身体のことでも心配ではあったが、
病気のことは医者任せにしかない。
だが、良太のことは、自分がフォローしていかななくてはならない。
ただでさえ、ばあちゃん子の良太である。
日に日に痩せていくばあちゃんを見て、平気なはずがなかった。
ましてや、この先に予想される未来は、
良太にとってはあまりにも残酷なものだ。

はたして、良太は乗り越えてくれるだろうか。
気の優しいさみしがり屋なところは、父親の明にそっくりだ。
普段は、愛おしいと思うその性格も、
今の幸子にとっては、最大の心配の種になっていた。

幸子は毎日、良太をばあちゃんの見舞いに連れて行った。
確実に弱っていくばあちゃんの姿を見て、
良太にも覚悟のようなものをしてほしかった。

五歳の子供には、少し辛いことかもしれない。
でも、死は誰にでも訪れる避けられない真実なのだ。

その日は、とてもよく晴れていた。

「今日は、洗濯日和だわ。」

空を見上げて、幸子がそう呟いた時、電話のベルが鳴った。
まだ、陽がやっと昇ったばかりのこんな時間に電話が鳴るなんて……。
ふと嫌な予感が、幸子の脳裏をかすめた。

「〇〇病院ですが……。」

予感ハ的中した。

真っ白な病室の中で、ばあちゃんは必死に病と闘っていた。
それでも、良太の姿を見つけると、うっすらとだが笑ってみせる。

「うあーん。」

良太が、急に大声で泣き出した。
子供心にも、今がいつもと違う特別な時間であるということを悟ったのだろう。
幸子は、良太の肩をぐっと抱き寄せた。
良太はそれでも、泣きやまなかった。

ばあちゃんは、一瞬困った顔をした。苦しい息を肩でしながら、
泣き叫ぶ良太をじっと見つめる。

そして、深呼吸をひとつした後、良太に向かってこう言った。

「良太、こっちへおいで。」

良太は泣きながら、ばあちゃんのベッドの横へ向かう。

「ちょっと、お耳をかしてごらん。」

喋るどころか、息をするのも辛いはずだ。

だが、ばあちゃんは最後の力を振り絞って、良太を呼んだのだ。

そして、良太の耳元で、何かを呟くように話している。

良太は時折、うんうんと頷きながら、

ばあちゃんの話静静地に聞いていた。

ばあちゃんの話が終わった時、あれだけ泣いていた良太が、ピタリと泣きやんだ。

それはまるで、

ばあちゃんが良太に魔法をかけたとしか思えない光景だった。

そのまま、ばあちゃんは眠ってしまった。

それから、数時間……。

静かに時が流れて行った。

それが、四人家族として過ごす最期の時間だった。

ばあちゃんが亡くなって、幸子は忙しい日々を送った。

人が一人いなくなるということは、とても大変なことだ。

ばあちゃんに線香をあげたいと訪れる人は、

暫くは途切れることがなかった。

「これも、人徳なんでしょうね。」

幸子は改めて、ばあちゃんの人としての大きさを感じていた。

そして、ばあちゃんの存在が大きければ大きいだけ、

家族の中に開いてしまった穴も大きいような気がした。

それでも、時が経つにつれ、親子三人の暮らしにゆっくりと慣れていく。

幸子にしても、つい、夕食を四人分作ってしまうようなことはなくなった。
明の沈み込んだ溜息も、だんだんと数が少なくなってきた。

不思議なことに良太は、あの病室でばあちゃんのことを聞いて以来、
二度と泣くことはしなかった。
葬儀の時も、誰もが涙をそっと拭う中、良太だけはしっかりとした視線で、
ただばあちゃんの遺影を見つめていた。

あの時、ばあちゃんは良太に何を言ったのだろう。

幸子は、それとなく何度か聞いてみた。
けれど、良太は決して答えてはくれなかった。

「約束だから、まだ秘密！」

そう言って、にっこりと笑うだけ。
気にはなったが、思っていたほど落ち込まなかった良太を見て、
内心はほっとしていた。

元気でいてくれるならいいか。

いつしか幸子は、そう思うようになっていた。

季節は巡り、木々から木の葉が舞い落ちた。
次に落ちてくるのは、おそらく白い天使達だろう。
このところ、かなり寒くなってきている。
いつ、初雪が降ってもおかしくはない。
ばあちゃんのいない初めての冬がやってくる。

何日か前から、良太は空ばかり見上げている。

「何を見ているの？」

幸子が、そう話しかけても、

「秘密。」

と言ってあどけない笑顔を見せる。
そんな時の良太は、やけに楽しそうだ。

「また、秘密？」

秘密が多くなるのはちょっと心配だったけれど、
それも成長の過程なのかもしれないと幸子は思っていた。
何より、良太が楽しそうにしてくれているのが嬉しかった。

ある日、いつものように昼食の準備に追われている幸子の耳に、
良太の声が響いた。

「降ってきた！ かあちゃん、降ってきたよ。」

普段はおとなしい良太が、あまり大きな声を出すので、
幸子はびっくりして外へ飛び出す。

そこに良太がいた。
顔に満面の笑みを浮かべて、空を見上げている。
良太のまわりにはちらちらと白い天使達が舞っていた。

「初雪だわ。でも、なんで……。」

幸子は、不思議に思った。
良太は、寒い季節が苦手だったのだ。
雪が大好きだったばあちゃんとは対照的に、
雪のダンスにため息をつく良太の姿を今まで何度か見たことがあった。

この雪は良太にとって、何か特別な雪なのかもしれない。

最近、良太がよく空を見上げていたのは、
たぶん雪を待っていたのだろう。
でも、なぜ？

「初雪が、そんなに嬉しいの？」

幸子は、良太をそばに抱きよせながら聞いた。

「うん。だってこの雪は、ばあちゃんの雪なんだよ。」

「えっ。ばあちゃんの雪って？ 」

思いもよらない良太の言葉に、幸子はとっさに悟っていた。

これが、ばあちゃんの魔法なのかもしれないと……。

「かあちゃんに教えてくれる？ なんてこの雪が、ばあちゃんの雪なの？ 」

「うん。雪が降るまで秘密だよってばあちゃんと約束したんだ。

だからもう、かあちゃんに話しても大丈夫だね。」

それから、良太はあの病室でのばあちゃんの魔法の言葉を教えてくれた。

あの日、ばあちゃんは良太にこう言ったのだ。

「なあ、良太。ばあちゃんは小さい頃から雪が大好きでな、
自分も雪になるのが夢だった。

ずっと長い間神様に、雪になりたいとお願いしてたんじゃ。
そしたらこの間な、神様がばあちゃんのところにやってきて、
願い事を叶えてくれるって言うんじゃよ。すごいじゃろ？

だからこれから、

ばあちゃんはこの身体を抜け出して雪になりに行く。

そんでな、雪になって空から良太のところに帰ってくる。

今年、一番最初に降った雪が、ばあちゃんだからな。

楽しみにしておいで……。

このことは、ばあちゃんが雪になって降ってくるまで、

とうちゃんやかあちゃんには秘密じゃよ。

みんなをびっくりさせてやりたいからな。

ばあちゃんがいなくて、少しさみしいかもしれんが、

良太は、ばあちゃんの夢……応援してくれるかい？ 」

「うん。ばあちゃんの小さい頃からの夢だったんでしょ？ 」

「そうかい。ありがとうね。じゃあもう、泣くのはやめにしておくれ。

良太が泣いていると、安心して身体を抜け出せなくなるからね。」

「わかったよ。もう僕、泣かないよ。」

「……でね。降ってきたんだよ。ほら、ばあちゃんの雪だよ。
おかえりなさい。ばあちゃん、おかえりなさい。」

良太は雪に向って、何度も繰り返して叫んだ。

あの苦しい息の中で最期まで、
ばあちゃんは良太を悲しませないようにそんな話をしてくれていた。

「やっぱり、私には追いつけそうもないわ。ばあちゃん、すごすぎるよ。」

幸子の目からは、涙が溢れていた。
この雪はもしかしたら、本当にばあちゃんなのかもしれない……。
あんなにすごい人だもの、
そのくらいのことやってしまうかもしれないじゃない。

「ただいま、幸子さん。」

ふと、ばあちゃんの懐かしい声を、幸子は聞いたような気がした。
私もいつか、ばあちゃんのような人になりたい。
なれないかもしれないけど、少しでも近付きたい。

そしていつかは、私も雪になりたい……。

「おかえりなさい、ばあちゃん。」

気がつくと、舞い落ちる雪に向かって、幸子もそう呟いていた。